

佐土原キリスト教会 2021年11月28日礼拝説教

聖書箇所：ルカの福音書1章26～38節

説教題：神に委ねて

先週月曜日にある姉妹とお会いしました。その姉妹が「お母さんはその後いかがですか。洗礼は受けられましたか」と聞かれました。以前、私が「母の救いを祈っています」とお話ししたのを覚えて下さっていたようです。「いえ、まだです」と申し上げると、「お母さんはいくつになられますか」と聞かれるので、「87歳です」と答えると、「私の母は95歳で洗礼を受けました。諦めて祈ることを止めた時もあったけど、神様は祈りを聞いておられました」と言われました。お母さんは、以前から信仰心は持っておられたそうですが、その信仰心が聖書の神と結びつかなかった。それが—(色々あられたのでしょ)—95歳のクリスマスに、ついに聖書の神と結びついて洗礼を受けられたそうです。その姉妹ご自身も「40年前のクリスマスに洗礼を受けた」と言われました。「クリスマスは特別な時だな」と改めて思わされたことでした。今日から「待降節(アドベント)」に入ります。皆様の上に、クリスマスの恵みの光が照り輝きますように、心からお祈りすることです。

今日の箇所は、天使がマリヤに「イエスの誕生」を予告する箇所です。この箇所を読んで、思い出した話があります。この兄弟は、神学校で学んでおられる方でしたが、ある時、幻を見せられたそうです。彼は、崖の上に立っていましたが、目の前に真っ暗な世界が広がっていました。そこで神の声を聞くのです。「もう1歩、踏み出さない」。もう1歩前に出たら、真っ暗な谷に落ちて行くように見えるのです。しかし、声は繰り返します。「もう1歩、踏み出さない」。彼が、覚悟を決めて飛び出した時、その真っ暗な闇が、スーッと幕が開くように分かれて、素晴らしい世界が目の前に広がったそうです。「御言葉に従うというのは、こういうことですかね」と言われました。御言葉に従うのは、時にとっても難しいです。「自分の敵を愛さない」(ルカ6:35)。難しいです。しかし、御言葉に飛び込んだ時、新しい世界が広がる、そういうことがあるのではないのでしょうか。

今日、2つのことを申し上げます。

1. 聖書の内容～マリヤの信仰と決断

「クリスマスの物語」は、天使ガブリエルがナザレという村に住む娘マリヤに現れて「あなたは聖霊(神の霊)によって男の子を産みます」と告げるところから始まります。この時、マリヤは何歳だったのか。「14～15歳だっただろう」という学者もいます。いずれにしても、恐らくまだほとんど少女のマリヤに、神の使いが現れて呼びかけるのです。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます」(28)。「おめでとう」、直訳すれば「喜びなさい」という言葉です。何が「おめでとう」なのか、何を「喜べ」と言われているのか。具体的には「マリヤが聖霊によって身ごもって、男の子を産む」ということです。しかし考えれば、人間的にはとても喜べる話ではありません。27節に「この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった」(27)とあります。彼女はヨセフと婚約中でした。当時のユダヤでは、婚約はほとんど結婚を意味していました。そんな状況で「聖霊によって身ごもった」、もしヨセフに信じてもらえなければ、ヨセフは会堂で公に事実を公表して離縁を宣言することになります。そうするとマリヤは、「不身持な女」として「石打ちの刑」です。「おめでとう…」(28)どころではありません。マリヤは「どうしてそのようなことになりえましょう」(34)と困惑というか、抵抗と言いか、そのような思いを言い表します。彼女は戸惑いました。しかし結果としてマリヤは「ほん

とうに、私は主のはしため(しもべ)です。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように」(38)と言うのです。マリヤは、これから自分の身に何が起こるか分からない、しかし、そんな恐ろしさの中に飛び込んで行く、全てを主に委ねることを信仰によって決断するのです。

このマリヤの言葉は、とてつもなく重要な言葉でした。神は、滅びに向かって歩いている人類を救うために、予めから計画しておられた「救いのプラン」を実行に移されました。それは「神の独り子が人の全ての罪を背負って十字架に掛かり、その十字架の贖いを信じる信仰によって、神はその人と和解して下さり、その人は、神との関係に守られて生き、守られて死ぬ、そして神との関係に支えられて復活する、そして永遠の命を生きる」、そのような壮大なプランでした。そのためにキリストは、神でありながら、人の身代わりになれるように弱き人間の赤子として生まれて下さいました。しかし神は、そのプランの実現のためにキリストを産んでくれる女性を必要とされたのです。その神の申し出に対して、マリヤは「私は主に従う者です。あなたの御業のために用いられたいと願います」と答えたのです。14~15歳の少女が、です。そのマリヤの返事に、神の計画が、人類の救いの歴史が、私達の救いが、懸かっていたのです。そして「救い主イエス・キリストの誕生」は、このマリヤの一言によって「現実」になるのです。

2. 信仰生活への適用~神に用いられることを喜ぶ

私達はこの個所から何を学ぶことができるでしょうか。

ある学者が言いました。「マリヤは片田舎の普通の娘だった。彼女は何を持っていたわけでもなかった。しかし、ただ1つ、マリヤは『喜んで主に用いられよう』という思いだけは持っていた…そして、それをこそ神が喜ばれたものだった」。マリヤは、神様に自分を委ねるのです、預けたのです、任せたのです。そして、神様が用いたいと願われるなら、用いて頂こうとしたのです。その視点が、私達の信仰も、神様に喜ばれるもの、祝福をもたらすものにするのではないのでしょうか。

私は、先日もお話しした森繁さんの話を思い出します。彼はアメリカで信仰を持ち、「日本人に伝道したい」と思って日本で教会を始めたのですが、事情があつて、家族のためにハワイに住むのです。しかし仕事がない。ようやく見つけたのがマカデミアン・ナッツの農場で草を刈る仕事でした。ずぶ濡れになりながら働きました。彼は神に叫んだのです。「神様、私はここで何をやっているのでしょうか。伝道もできません。伝道ができなければ生きている甲斐がありません」。3か月、泣いて祈っていたそうですが、やがて「神様、もしあなたが私にさせたいことがここで家族の面倒を見ることだったら、それをあなたがさせたいのなら、私はやります。一生でもやります」。そう祈るようになるのです。それもまた、神に委ね、神に用いられようとするのではないのでしょうか。そこから、彼の生活だけでなく、奉仕も導かれて行くのです。

なぜ、神様に用いられることを喜ぶことができるのでしょうか。神様が私達を用いたいと思われる時、それは「滅私奉公」のようなものではないのだと思います。もちろん、マリヤの経験は、神の子を産むという、私達から遠い特別な経験です。しかし、神様に用いられることの祝福を教えてください。マリヤは、神の子を産むために神に用いられることを引き受けました。大変な経験でした。しかし、イエス様を育てる中で、イエス様を通して多くの祝福も経験したはずです。やがてマリヤは、我が子の十字架という苦しみを、絶望を経験します。しかし彼女は、その苦しみの中で神に支えられて行くのです。それだけでなく、今度は、誰よりも大きな喜びをもってイエスの復活を経験するのです。「神に委ねた人生に、神は決して下手なことは為さらない」ということを、身をもって経験して行くのです。

私達が読んでいるこの物語、なぜルカは、この「受胎告知」の物語を知っているのでしょうか。それは、他ならぬマリヤ自身が後に教会で語ったからではないでしょうか。人々の求めに応じて何度も語ったのでしょうか。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます」(28)という言葉と共に始まった「神と共に歩む人生」、それはとんでもないように見える出来事で始まった。しかし、振り返って見た時、「どれほど神の恵みを経験させられる人生であったか、どれほど納得の出来る人生であったか」、彼女は、感謝と喜びを持って語ったに違いないのです。さらに私は、やがて天に帰ったマリヤは、イエス様と再会して、どんなに喜んでいるか、どんな恵まれた時を過ごしているか、そんなことまで思われます。だから、クリスマスに生まれたイエス様は、死ぬために生まれて下さったのに、マリヤの歩みには、この後、苦しみがあるのに、「クリスマス物語」の全体の調子は、喜びに溢れているのです。

繰り返しますが、マリヤの経験は特別な経験です。しかし、神に委ね、神に任せ、神が必要とされるなら神に用いられて行くことを喜ぶこと、そのことの持っている深い恵みは、私達も共有できるのではないのでしょうか。そして神様は、マリヤだけでなく、私達をも、深い祝福を味わわせるために、用いようとして下さるのではないのでしょうか。

作家の三浦綾子さんは、新聞社の一千万円懸賞小説に応募する時に、「原罪」の問題を取り上げて、「日本人にも神に目を向けて欲しい」という願を持って「氷点」を書きました。そして、それが750点余りの参加作品の中から1位に入選した時、夫の三浦光世さんは綾子さんにこう言うのです。「綾子、神を畏れなければならぬよ…神は、私たちが偉いから使ってくださいるのではないのだよ。聖書にある通り、我々は土から作られた、土の器に過ぎない。この土の器をも、神が用いようとし給う時は、必ず用いて下さる。自分が土の器であることを、今後決して忘れないようにね」。最初にご紹介した姉妹は、ご自分が教会に導かれる前に信仰しておられた新興宗教の仲間だった方々を—(その方々はその信仰の中で思い悩んでいる姿を見て)—教会に導かれたそうです。その方々は、すでに天に召されたそうですが、「神が私を用いて下さいました、信仰宗教の経験も無駄ではありませんでした」と喜んで話して下さいました。神様は、私達にも信仰の深い満足を与えたいと願っておられるのではないのでしょうか。だから、私達も用いて下さるのではないのでしょうか。いや「私と一緒に神の業をしよう」と言って下さるのではないのでしょうか。「私の計画にはあなたが必要だ」と言って下さるのではないのでしょうか。

私は先日、ある方の口を通して神の言葉を頂きました。「主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである」(イザヤ60:20)。生きてると、色々なことがあります。皆様もそうでしょう。しかしこの言葉は、私の希望となりました。神様は、希望を下さる神様です。いや、そもそも私達のために死んで下さった神様です。死ぬために生まれて下さった神様です。この神様に預けた人生に、神様は下手なことをなさるはずがありません。だから、神様に人生を委ねようではありませんか。大きな御手に自分を任せようではありませんか。そして、神様が必要とされるなら「私で良ければあなたの業のために用いて下さい」と申し上げる信仰を持ちたいと願います。

しかし、神様に委ね、任せ、用いて頂く、と言っても、それは日常的にはどうすることでしょうか。マリヤは、マリヤに告げられた御言葉に仕えようとししました。「あなたのおことばどおりこの身になりますように—(この身を通して御言葉が現実になりますように)」と神の言葉に仕えようとししました。同じように、私達にとっても、それは、与えられた状況の中で、神の御言葉に仕えて行くことではないのでしょうか。それが、神様に用いられるように生きて行くことなのではないのでしょうか。先程も申しましたが、私は「あなたの嘆き悲しむ日が終わる」(イザヤ60:20)、

この言葉に身を委ね、この言葉に向かって生きて行きたいと願っています。それもまた、御言葉に仕えることではないかと思っておりますが…。

「百万人の福音」でジェイコブ・ディシェイザーという人の証を読みました。この人は、日本軍の真珠湾攻撃に激怒して、復讐に燃え、名古屋空爆に志願しましたが、空爆の後、中国の日本軍支配地域に不時着して、日本軍の捕虜になりました。そこで憎い日本軍の看守に反抗して、状況をどんどん悪くしていました。そんなある日、捕虜仲間が赤痢で死んでしまいます。その時、なぜか、日本軍の看守が棺桶の上に1冊の英語の聖書を置いて行きました。彼はその聖書を読んでイエス様の信じるのです。自分の罪を悔い、神の赦しを願い、「自分の敵を愛する」というイエス様の言葉に仕えたいと思い、実行に移すのです。それまで憎しみの関係だった日本軍の看守に自分から「オハヨウゴザイマス」と挨拶をするようにしました。そうしたら看守も、戸惑いながらも蒸したサツマイモを差し入れてくれたりするようになりました。彼は言っています。

『互いに愛し合いなさい』と言った時、イエス様は最善の行動方法を語ったのだ。神の方法は、試しさえすれば上手く行くのだ。「神の方法は、試しさえすれば上手く行く」、この言葉は深いと思いました。さらにイエス様の「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」(ルカ 23:34)の言葉が、彼の心に突き刺さりました。「看守はキリストのことを知らないのだ。日本で福音を伝えたい」。戦後、彼は日本にやって来て伝道しました。その伝道によって、あの真珠湾攻撃の爆撃隊長だった淵田美津雄さんがクリスチャンになるのです。神様は、彼を通して素晴らしいことをなさるのです。

いずれにしても信仰者が、神の言葉に仕えて行こうとする時、私達も、神の御業に関わって行くような、振り返った時、納得の行く、満足の嘯みしめられるような、信仰生活を送ることができるのではないのでしょうか。先の姉妹は、色々と証しをして下さった後、「神の御言葉に信頼する時、神は御業を現わして下さる、ということを経験しました、この神様は凄いです」と確信を持って言われました。私達は、信仰の豊かさ、力、祝福をもっと味わわせて頂けるのではないのでしょうか。

そしてそれは、地上の祝福だけでは終わらない。先程、マリヤが天上で喜んでいるのではないか、ということを申し上げましたが、御言葉に仕える歩みは、私達の天上の祝福にも繋がっているように思います。